

## 第74回全道高等学校演劇発表大会 in 小樽「運河きらめくオタルナイ大会」

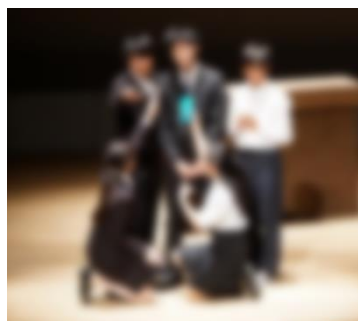
上演番号 10 番 北海道苫小牧東高等学校（苫小牧支部）

### 「やっぱり、こっちがいい」 作：晴山能（生徒創作）

緞帳が上がるとそこは素舞台だった。やがて、喫茶店のバイト店員・竹中直人の合図によって大道具が運び込まれ、舞台空間が出来上がっていく。それは真新しく、面白く感じられた。そのうち、高校生たちがやってきて様々な会話が繰り広げられていく。その会話は四股のアイドルの話に始まり、やがて自分たちの恋愛の話へと発展していく。「好きな人にいつもと違う姿を見せたいが、好きではない人に見せるのは嫌だ」という女子の思いや、「好きな人のスマホから違う男の名前が出ると混乱してしまう」という男子の思いなど、高校生にとって非常に高い共感が得られる話題だ。また、既存のキャラクターや有名ミュージシャンの話を入れることで、高校生など特定の世代だけでなく、あらゆる世代の共感も得ていたのではないかな。



テンポのよい会話の合間に出る丁寧なボケや秀逸なツッコミにはとても笑顔にさせられ、まるでコントを見ているかのようなようだった。舞台の中心（観客の視点）が「男子」から「女子」へと切り替わる



場面展開も飽きさせない工夫として捉えられた。そして登場人物の中でもかなりの変人キャラである竹中直人は、話の“微妙な空気”を変えてくれるマドラーのような役割だった。どのキャラクターも魅力的で個性が作り込まれているように感じられたが、なかでも物語の中心となる祥太と葵、永遠とりほの2組のカップルにはとても惹きつけられているように思えた。正直すぎる祥太と葵、正直になれない永遠とりほ。例えが同じな祥太と葵、おつりを間違える永遠とりほ……といったように、カップル同士で似ているところもあり、似ているようで似ていないようなところもある。そんな「2組のカップル」を、いつのまにか応援してしまっていたという意見が多かった。

「やっぱり、こっちがいい」それは一度離れてしまった祥太と葵、永遠とりほの気持ちの代弁なのではないか。物語の中で出てきた「見方」と「見え方」が変わったというセリフ。それは普段、憶測でしか考えられないことをそのままにするのではなく相手の気持ちを自ら知ろうとすることが大事なのではないかということを教えてくれた。この劇はとにかく面白く共感性の高い作品だった。

